



IMAZINE No.2



2024年11月発行 発行責任者：ジェンダー支援チーム学生ピアスタッフ



○ZINEって何だ？

皆さんこんにちは！ BHE ジェンダー支援チームの広報誌、IMAZINE（イマジン）の第2号をお届けします！

毎号ジェンダーやセクシュアリティに関する情報をお届けするこちらの広報誌、今回はまず初めに、“IMAZINE”というタイトルの由来になっている“ZINE”（ジン）というメディアについて、本当にざっくりとご紹介します。

簡単に説明すると、ジンというのは、有志によって作成される、非営利の自主制作出版物のことです。その内容は、随筆や評論、小説、イラスト、写真……とにかく色々あります。よく「ジンは“Magazine”（マガジン）の略語である」という説明がなされますが、これは誤りです。実はジンの由来となったのは、“Fanzine”（ファンジン）という言葉なのです。

この点は重要です。なぜならファンジンというのは、出版社が記事を厳選し、冊子を販売するという、マガジンの権威主義的・資本主義的な性格に対する批判から生まれたメディアだからです。そんなファンジンに由来するジンは、誰でも制作や配布が可能であるという特徴から、特に社会的・経済的に弱い立場に置かれている人々にとって、重要な表現の手段となってきました。ゆえに現在のジン・カルチャーには、フェミニズムを始めとする社会運動が大きな影響を与えています。

皆さんもぜひジンについて調べ、ご自分でもジンを作成してみてください。ジンへの道は全ての人に開かれている！

(参考文献：村上潔, 2021, 「ジンというメディア=運動とフェミニズムの実践 - 作るだけではないその多様な可能性」, 田中東子編『ガールズ・メディア・スタディーズ』, 北樹出版, 130-148)

○日本の女性運動においてミニコミが果たした役割 - 樋熊亜衣さん

女性たちの社会運動において、自主制作のメディアはどんな役割を担ってきたのでしょうか。BHEのディレクターであり、女性運動やダイバーシティ&インクルージョンが専門の、樋熊亜衣（ひぐま あい）さんにご寄稿いただきました。

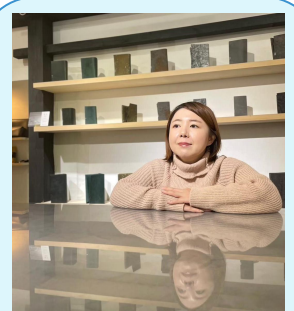
みなさんはフェミニズム運動にとって「ジン」が重要な役割を果たしていたことを知っていますか？ ジンは、1970年代頃「ミニコミ」という名称で呼ばれていました。ミニコミとは、「マス・コミュニケーション・メディア（マスコミ）」と対になる言葉で「ミニ・コミュニケーション・メディア」の略称といわれています。また、ミニコミやジンなどを総称して「オルタナティブ・メディア」と呼ぶこともあります。

それでは、ミニコミがフェミニズムにとってどのような役割を果たしたのでしょうか。時代は1970年代頃の第2波フェミニズムまで遡ります。この当時は、“戦前の婦人運動（第1波フェミニズム運動）が主張してきた男女同権は達成されはすなのに、女性にとって生きづらい社会は続いたまま”という状況でした。その生きづらさの原因が男性中心主義的な制度や考え方にあると主張し批判したのが、第2波フェミニズムの始まりでした。

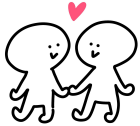
特にこのとき重視されたのが「語る」という行為です。女性とはこうあるべきだという規範が強い社会で、自らの感情や考えを女性が言葉にすることはとても難しいことでした。たとえ言葉にしても「女のくせに」「女らしくない」と批判されてしまいます。そのため、自分の考えを言葉にすること、そしてそれを他の女性たちと共有しあうことはとても大切な活動のひとつでした。この「語る」という行為は、対面でのコミュニケーションのみを指すのではなく、文章を書いたり読んだりすることもその一環として考えられています。

ここで登場してくるのがミニコミです。女性たちは個人やグループでミニコミを作成し、それまで「些末な事」「個人のこと」として切り捨てられてきたようなことについて意見を言い合いました。たとえば、仕事や家庭における差別だけではなく、タブーとされていた「性」に関する話（生理や妊娠・出産のこと、自身のセクシュアリティのことなど）も含まれていました。彼女たちの抱える生きづらさの原因がどこにあるのか、ミニコミをつうじて問題意識を高めていったのです。

こうしたミニコミの中には、「ウイメンズアクションネットワーク」や「国立女性教育会館リポジトリ」など、オンラインで公開されているものもあるので、ぜひ見てみてください。時を超えて当時の女性たちの考えに触れることができるのもミニコミの良いところです。この「IMAZINE」も徒然なるままにジェンダーやセクシュアリティについて語れる場になれば良いと思います。



樋熊亜衣さん
BHE ディレクター
博士（社会学）



タイで同性婚が法制化 来年1月施行へ

NEWS!

タイでは2024年9月24日、同性婚を認める法案がワチラロンコン国王の承認を受け、来年1月に施行されることが決まりました。この法律によって、同性同士の結婚でも異性間の結婚と同等の権利が認められることになります。

同性婚が法制化されたのは、アジアでは台湾・ネパールに続き3例目、東南アジアではタイが初めてです。この決定を受けてタイのペートタン首相は、SNS上に「愛は勝つ (#LoveWins)」というハッシュタグとともに「すべての人の愛に祝福を」という投稿を行い、法制化を祝福しました。また、セクシュアルマイノリティの当事者を支援する団体は、法律施行日の1月22日に合わせて複数の同性カップルと一緒に結婚の届出を出すことを提案し、呼びかけを始めました。

(参考: NHK NEWS WEB, <https://www3.nhk.or.jp/news/html/20240925/k10014591811000.html>)



おすすめコンテンツ: 映画編



リリーのすべて (The Danish Girl)

1930年代に世界で初めて性別適合手術を受けたデンマーク人、リリー・エルベの体験を描いた伝記映画です。同性を愛するだけで病氣だとみなされ、「治療」や入院を強要される時代に、リリーは出生時に割り当てられた性と、自分が体験し・表出する性とが異なることに気付きます。様々な困難を抱えながらも、性別違和を理解する医師との出会いや、男性として結婚した配偶者、ゲルダ・ヴィーグナーの支えによって、彼女は徐々に「リリー」としてのアイデンティティを確立していきます。1930年代にセクシュアルマイノリティとして生きていく困難と、それを乗り越えていくリリーの勇敢な生き様、そして葛藤を抱えながらリリーを支え、愛したゲルダの姿などに注目して鑑賞してみてください。



○ 編集後記

10月27日、第50回衆院選の投開票が(つくば市では同日に市長選と市議選も)行われました。選挙権をお持ちの皆さんは、しっかり投票に行かれたでしょうか? 来年7月には参院選も予定されていますので、そちらもお忘れなく。

もちろん、選挙は市民が政治に対して意思表示を行う重要な機会です。しかし、政治参加の方法は選挙だけではありません。デモや陳情、署名など、政府や社会に対して意思表示を行う方法は色々ありますし、会話やSNSの投稿を通じて自分の問題意識を伝えることだって、立派な政治参加です。

女性やセクシュアルマイノリティの人々は、自分たちが直面する困難を共有し、様々な方法で社会に発信することで、人々の意識や社会制度を少しずつ変えてきました。最初に問題意識を周囲に伝える人がいなければ、社会を変えることは不可能です。多くの人が自分にとって無理のない方法で、政治参加を行ってくださればいいなあ、と思います。

(方法のひとつとして、ジンという選択肢もありますよ!)

カミングアウトって知ってる?

「セクシュアルマイノリティの人々が、自身の性的指向やジェンダーアイデンティティなどを伝えること」を意味する言葉です。カミングアウトをいつ、誰に対して行うか(あるいは行わないか)という選択は、1人ひとりの当事者が、自分にとって望ましい生き方や、生活上の具体的な困難などを考慮して行うものです。したがって、第3者が他者のセクシュアリティを了解なしに暴露する、アウトイングと呼ばれる行為は決して行ってはいけません。

現在第4版の「LGBTQ+に関する筑波大学の基本理念と対応ガイドライン」(Web版あり)には、カミングアウトに関する多くの記述があります。カミングアウトについて悩んでいる当事者の方や、カミングアウトを受けたけれど対応が分からないという方は、是非ご一読ください。

HANASO!

IMAZINEでは、読者の皆さんのジェンダー・セクシュアリティに関するお悩みやご質問を募集しています。なかなか人に相談しにくいお悩み・ご質問であっても、私たちが責任をもって解決方法や答えを考えます! ご応募は下のQRコードから。もちろん匿名でOKです!

※ お寄せいただいたお悩みやご質問には、今後のIMAZINEでお答えします。

※ ジェンダー支援チームに対するご要望、本誌の感想などもお待ちしております!



Information

ジェンダー支援チームは、全ての学内者が自らのジェンダー・セクシュアリティについて安全に話せる場所、セーフスペース「KiteKite(きてきて)」を運営しています。詳細は組織のWebサイトからご確認ください!

※ その他のジェンダー支援チームの取り組みについても、組織のWebサイト(右のQRコード)からご確認ください。

※ 公式Xアカウント → @UTsukuba_gst

